

Essay

Sapiarc.com

2013年10月1日(2013-7)

堀辰雄の「風立ちぬ」を読む

宮崎駿監督のアニメ映画「風立ちぬ」が大変評判になった。それにつられて、76年も前に書かれた、堀辰雄の「風立ちぬ」を思い出す人や、そういう本があることを初めて知った人も多いのではなかろうか。

私は、このアニメ映画を見たいとは思わない。ゼロ戦については、既にいろいろ書かれたものを読んでいて、今さらアニメ映画を見る気はしない。堀越二郎という人物についても、アニメの主人公として見たいとは思わないからだ。むしろ、今になって何故、宮崎監督が堀越二郎という人物を主人公にしたアニメ映画を作ったのかがわからない。また、もっとわからないのは、アニメ映画の題名に、堀辰雄の代表作としてよく知られている「風立ちぬ」と同じものを使ったということだ。そうしたことは、宮崎監督自身の思い入れがあるのだろうが、私は違和感を覚える。

実を言うと、今度のことで、私は堀辰雄の「風立ちぬ」をはじめて読んだ。しかも、何度も読み返した。この作品の主人公の「私」あるいは「俺」は、堀辰雄自身だと言っても良いのだろうが、そのせいか名前は書かれていない。相手の女性の名前は「節子」だが、苗字は書かれていない。父親は顔を出すか、何をしている人なのかはわからない。母親や兄弟姉妹なども出てこない。つまり、この作品では、そのテーマである死と生に関わるもの以外は、何も語られていないのだ。そういう点では、普通の小説というよりも散文詩のような作品だと思う。文章には品の良さがあり、昭和前半に書かれたも

のなかでは、最高のものではないかとすら思う。

「節子」と「私」は、物語が始まるより2年前に知りあって、婚約もしているのだが、2人とも結核患者なのだ。そういうことは今では考えられないが、当時は実際にあり得たのだ。はじめに、「節子」が自宅で療養している生活が描かれているが、それからわかることは、東京の山の手で相当な暮らしをしている家庭の娘であり、おそらく大正時代から太平洋戦争が始まるまで、そういう環境でのみ話された言葉を使っているということだ。「節子」の年齢もわからないのだが、おそらく20歳を過ぎてはいないだろう。当時のこういう女性は、今の「肉食系」の女性とはまったく別の人種といっても良い人たちだったのだ。だからといって、1937年（私が生まれた年）に書かれた、この作品には古臭さを感じさせるものがあるとは思わない。少なくとも私は感じない。

「節子」の病状が思わしくないため、八ヶ岳の西側山麓にある相当大規模のサナトリウムに入り、「節子」が本当の患者で、「私」はその付添いとして、側室付きのひとつの病室に住むことになる。そこに行く前から、結末は本人たち、とくに「節子」にはわかっていた。彼女は、『...私達、これから本当に生きられるだけ生きましようね...』と言う。

小説というべきか、堀辰雄が自分自身の体験を書いたものというべきか、区別するのが難しいこの作品は、普通ではない環境下での若い男

女の僅か1年間ほどの生活を描いたものであるにもかかわらず、時代を超えて語りかけてくるものを持っている。死を予感しながらも、極めて純粋な愛というものが実際にあり得ることを、作家は語りたかったのだが、逆に言うと、そういう環境の中でこそ、純粋な愛というものは存在するのかもしれない。次に引用する文章の持つ、人の心を動かす力を何と評すべきだろうか。

『薄暗いベッドの中に、節子は其処にいるのだかいけないのか分からないほど、物静かに寝ている。ときどき私がそっちへ顔を上げると、さっきからじっと私を見つめつづけていたかのように私を見つめていることがある。「こうやってあなたのお側にいさえすれば、私はそれで好いの」と私にさも言いたくってたまらないでいるような、愛情を籠めた目つきである。ああ、それがどんなに今の私に自分達の所有している幸福を信じさせ、そしてこうやってそれにはっきりした形を与えることに努力している私を助けていてくれることか！』

生きることの意味は、私も学生時代に考えたが、そのときの結論は、とにかく力一杯やってみるしかないという、単純至極なものだった。そして、その後半世紀以上を経て、今またこの問題は私に問いかけられている。今の私にとって「本当に生きる」ということはどういうことか、そもそもそれは可能なことなのか。堀辰雄は、自分の文章が後年シニアな人間に与える影響までは考えていなかっただろうが、「本当に生きられるまで生きる」という言葉の意味と重さは私に付きまとして離れないだろう。（おわり）